

図書紹介

James S. Colman(ed.); *Education and Political Development*. Princeton University Press, Princeton, New Jersey, 1965. xii+620p.

社会経済発展と教育というテーマは、最近ユネスコによって取りあげられている問題である。本書は政治発展と教育というプロボークな問題を提起し、これに直さいに切りこんでいるユニークな文献であり、注目に価するものといつてよい。

本書は、アメリカの社会科学学会の比較政治委員会の企画になるところの、「政治発展研究」叢書の第四集である。全体は、四部すなわち、教育的後進性のパターンと問題、政治優位の教育的発展のパターン、低開発国における近代のエリートの教育、教育計画と政治発展よりなり、おのおの数編、全部で17の論文がおさめられている。1962年6月、Lake Arrowhead で開催されたセミナーで、教育学者、政治学者および社会科学関係の学者が述べた所論がここにまとめられている。右の比較政治委員会のチェアマンである Lucian Pye 氏は、本書の序文で、このようなものを出す趣旨をつきのように述べている。「一国の発展における教育の重要性にもかかわらず、これについての研究があまり手がけられず、その間にギャップが存在する。アメリカの現在の対外援助のうち五分の一が教育のため消費されている。しかも低開発国においては、ヨーロッパ諸国におけるよりも高い比率の教育費が投じられているが、教育投資は依然として、従来どおりのありきたりのやり方で行なわれているのにすぎない。とにかく、政治と教育の関係は一般に閑却されている。このような理由から政治発展と教育という問題を取りあげた」といつているのである。実際、ここでは、一国の近代化の過程において、教育がいかなる役割を演じ、または演じうるのかということ、教育過程と政治の進展において、両者間にどのような相関関係が存するかということについて、真正面から取りくんでいるのである。

われわれにとって興味あるのは、本書において東南アジア諸国がどのように取りあつかわれているかということである。ところで、残念なことには、この地域はあまり取りあげられているとはいえない。すなわち、第一部の教育的後進性のパターンと問題の中で、インドネシアが、第二部の政治優位の教育的発展のパターンで、フィリピンが取りあげられているのにすぎない。インドネシアについて堂々たる筆陣をはっているのは、California 大学の小壮気鋭の比較教育学者、Joseph Fischer 氏である。インドネシア、ガジマダ大学に教鞭をとったこともある氏は、アメリカにおけるインドネシア研究において現在頭角をあらわしつつある人であり、私にとつても個人的に親しい友人である。インドネシアの教育を論ずるのには、本書の氏の所説をせひとも読む必要があろう。フィリピンについて述べているのは、Yale 大学で政治学を講ずる Carl Gandé 氏である。氏は有数のフィリピン通であり、フィリピンの政治についての著作もあるが、ここに述べられているのは、政治学者の立場から見たところのフィリピンの教育であり、そのような理由から、この国の政治および教育の関係について、前者にあまりに多くの bias がおかれているように見える。これはこれで、一つの所論であるが、フィリピンを政治優位の教育的発展が見られる国として、ソ連および日本と同列に取りあつかっていることは、氏の立場からは当然としても、客観的にそれほど説得力があるものであろうか。むしろ、この場合、タイなどが取りあげられるべきではなかったかと思われる。

同じ政治優位の教育的発展が見られる適例として、日本を論じているのは、われわれにとってなじみ深い Columbia 大学の Herbert Passin 教授である。われわれの東南アジア研究計画のよき理解者かつ支持者である氏は、豊富な資料を駆使して、日本の教育と過去における政治との関係、その近代化におよぼした影響などを論じてあますところがない。このような問題について論ずるに、これ以上の適任者はあまりないであろう。

(相良惟一)

H. Myint: *The Economics of the Developing Countries*. Hutchinson & Co. Ltd., London, 1964. 192p.

去る5月末、ミント教授が国際シンポジウム「東南アジアにおける日本の将来」に出席するため比叻山ホテルにこられたとき持参されたのが本書である。教授はこの著書になかなかの自信があるようで、近く邦訳が出版されると楽しみに語っておられた。

このシンポジウムで教授の読まれたペーパー「アジア経済発展の2つの型——内向型と外向型——」とは、きわめて好評であった。「中央公論」昭和40年9月号に全文が翻訳されてのっている。

このペーパーが高く評価されたことは、教授の経済学理論水準の高いことと、低開発国における経験なり認識なりの深いこととによろうが、とにかく教授の学殖を裏づけるに十分であった。

戦後いち早く「厚生経済学」(Hla Myint, *Theories of Welfare Economics*, London, 1948.) をロンドンで出版した鬼才である。教授は独立後のビルマに帰国し、ラングーン大学総長となった。しかし、ビルマではいれられず、現在はオックスフォード大学の低開発国経済の Senior Lecturer である。教授は、「現在、自分は東南アジアよりも、アフリカやラテン・アメリカに興味をもっている」と私に語ったが、これは母国ビルマを中心として東南アジアの実態を熟知しているから、いまそれ以外の後進地域のデータも集めているとの意味のようであった。

こうした広いデータと、「厚生経済学」以来の教授の近代経済学的知識との集積が、本書「低開発国の経済学」であるといえよう。

本書は200ページたらずのものであるが、ここに低開発国経済学の主要問題が、きれいに論理的に組み立てられている。

教授は低開発諸国の間に、人口圧迫と経済成長度の2点において、かなりの相違があるとの事実認識から、低開発国経済論を組み立てる。この相違こそ、低開発諸国の経済を特徴づける具体的な「貧困」またその解決策を各国で異ならしめているとする。

そこで、第1部として人口圧迫のない後進国経済の問題点として、農民生産物輸出の増加と貨幣経済の成長、鉱山、プランテーションの発達と貸銀経済の成長、2元的金融制度と金融制度の従属性・独立性をと

りあげる。

第2部は、人口圧迫下の後進国経済の問題点である。そこでは、人口圧迫と総資本必要、経済発展のための基本的最低努力と均衡のとれた成長計画の規模、均衡のとれた成長の型と経済発展率、国際貿易と経済発展等の問題を分析する。

最後の章、開発政策の一般的諸問題として、開発政策のディレンマ、市場機構、教育投資、国際的援助の4項目があげられる。

ミント教授は、私には、きわめて明晰であり、かつ分析的な性格の持ち主であるように思われる。その反映として、本書は、低開発国の経済をどう開発すべきかという実際の問題よりも、低開発国経済の性質分析ともいべきアカデミックな問題に重点がおかれている。この意味での低開発国経済論としては、本書は、今日の世界的最高水準をゆくものと思われる。東南アジア諸国の経済開発を研究するためには、本書はその理論的基礎をうるために、ぜひとも一読されなければならない。(本岡 武)

Herbert Phillips: *Thai Peasant Personality*, Univ. of California Press, Berkeley & Los Angeles, 1965, xii+231p.

John E. de Young 著の *Village Life in Modern Thailand* が本書と同じ Univ. of California Press で1955年に出版されて以来、タイ国に関する人類学的地域研究の成果が何冊か出版された。1960年 Thomas M. Frazer Jr. の *Rusembilan* が出版された時にはタイ国の地域研究もこれまで進んできたかという感が深かった。ところが、最近になって本書を手にとることによって、さらに、わたくしどもはアメリカにおける行動科学と地域研究の発達に目をみはったのである。

De Young から Frazer にいたるまで出版された単行本のほとんどが、村落調査を総合的にまとめたもので、どちらかという経済、社会、宗教などを総花的にまとめたものである。もちろん、そのなかでは Frazer の *Rusembilan* がかなり理論的色彩のつよい本であるが、全体としては従来の研究傾向を踏襲している。だが、本書は村落調査でえた資料の基礎のうえに書かれたものであるけれども、主題の扱いがいままでの書籍とことなり、いちだんと精密度を増した。そ

の意味で、アメリカにおける東南アジア研究がすでに第二段階に入ったことを知るのである。

本書はタイ国の首都バンコク周辺にあるバン・チャン（コーネル大学の地域研究プロジェクトがおこなわれた村）で、2カ年あまり調査をしたタイ農民の性格の研究である。

研究の目的としては、第一に中部平原におけるタイ人の成人にかんする性格的特徴の基礎的記述、第二には、いろいろな文化における性格の比較研究が当面している方法論的、理論的、技術的諸問題の解明である。

基本となっているデータは、直接観察による資料と、バン・チャンにおける111人におよぶ客観テストによるものからなっている。本の内容はつぎのようにまとめられている。第一章 バン・チャンの村、第二章 タイ人の性格にかんする客観的観察、第三章 調査の方法論、第四章 文章完成法、第五章 文章完成法によるタイ人の性格研究、第六章 タイ文化からまなんだもの。それに手頃な文献集がついている。

以上のような内容のなかで、著者はタイ人の「個人主義的」な傾向が人間関係にどのような影響をあたえているか分析している。また、たいへん興味ぶかいのはJohn E. Embreeが1950年に書いた論文“Thailand-A Loosely Structured Social System”, *American Anthropologist*, No. 52, PP. 181—103 以来、タイ人社会の特徴を示す用語となった‘loosely structured society’が、どのような過程で形成されるかということ、育児過程や小乗仏教との関係にまでおよんで論じていることである。

地域研究のなかでも、とくに心理学的接近法をする場合には、現地語の高度な知識とフィールドに長期滞在するということが、不可欠な条件であるということ、本書が教えるのである。

著者はカリフォルニア大学人類学部（バークレー）の準教授で、同大学の東南アジア研究センターのチェアマンである。同氏は今年の初夏から、タイ国で戦後に出現した‘あたらしいエリート’の研究に従事している。有能な人類学者だけに、その成果が期待されるのである。（飯島 茂）

Phaithun Kruakao, Dr.: *Laksana Sangkhom Thai lae Lakkan Phatthana*

Chumchon. Bangkok, 1963. 425p.

タイにおける地域開発の歴史は、1958年内務省内務局に、部内措置として「地域開発室」が設置されたことにより新しい局面に入る。同年10月、クーデタによって政権を握るや、「国家開発（Kan Phatthana Prathet）」を旗印に、つぎつぎと意欲的な施策を展開して行った故サリット元帥の強力な支持をえて、「地域開発室」はまず「部」に昇格し、ついで1962年には4課1室を擁し、全国の県・郡にまたがる巨大な下部組織にささえられる「地域開発局」へと発展した。本書は同局の研修課長であり、同時にタマサート大学、カセーサート大学で「地域開発論」、「社会学」を講じている Phaithun Kruakao, Ph. D. (Cornell) の労作である。その内容から見るに、おそらく同博士の担当する内務省地域開発指導員（Phatthanakon）の研修用テキストとして執筆されたものと思われる。

全体は補遺に含まれた独立の2論文をあわせ4部12章に分けられている。第1章は「タイ国民と地域開発」と題する総論。第2部「タイ社会の特質」は、「タイ社会の価値体系」（第2章）、「タイの社会的階層」（第3章）、「農村社会としてのタイ社会」（第4章）、「タイ社会の他の特質」（第5章）の4編の論文を含む。この部分は、本書を、その実践的目的から離れて、われわれ外国人読者にとってきわめて示唆的な内容をもつものにしてている。

これまでタイ社会の特質について論じたものといえは Ruth Benedict の戦時中（1943）の論文“Thai Culture and Behavior”（Cornell Univ. Data Paper Number 4, 1952）のほか、屢々引用される John F. Embree の古典的論文“Thailand-A Loosely Structured Social System”, *American Anthropologist*, No. 52 (1950) など、いずれもタイとは文化的背景を異にする欧米——とくに米国の学者の筆になるものばかりであった。したがって本書の第2部におさめられた一連の論文は、新しい方法論を身につけたタイ社会学者によるタイ社会の分析であるという点において、ユニークな価値をもつ業績といえよう。

たとえば第2章においてタイ社会の価値体系を論じた著者は、タイ人が“yok yong”すなわち「価値があると認める」資質として、(1)富、(2)権力、(3)年令・年功、(4)“Chao Nai”であること、(5)“Nak Leng”の心、(6)寛容、(7)報恩、(8)知識あること、

(9) 礼節をとりあげ、おのおのの内容をきわめて具体的に記述しその分析を試みている。このうち、たとえば“Nak Leng”などという概念ひとつをとってみても、これがタイの政治家に要求される重要な資質であるにもかかわらず、これまであまり人の注意をひかなかった。(a rogue; a rascal; a dishonest and unprincipled person (McFarland) などの訳語からはこの語がある context においてもつ特殊の内包——日本語の「親分はだ」にやや類似している——を想起することは困難であろう。)

また“Chao Nai”であるための条件として、(1)国王または国家によって名誉ある地位を与えられること、(2)机に坐って仕事をするか、あるいはまったく行事も為さずして、しかも生活に困らぬこと、(3)「家来・子分・付き人(Phu Tittam)」をもっていること、などの点をとりあげ、タイ人の中には、額に汗して労働にはげむ農民をいやしみ、かえって無為に日々を過ごす playboy の方を高く評価する傾向さえある点を指摘していることなども興味深い。

第3部は地域開発指導員の manual を目指したもので、地域開発の理論と実践につき4章にわたり論じている。補遺の「地域開発局の事業」(第11章)は、同局設置の沿革と現状につきのべており、研究者の参照すべき基本的重要性をもつ文献といえよう。

(石井米雄)

Choop Karnjanaprakorn: *Municipal Government in Thailand as an Institution and Process of Self-Government*. Institute of Public Administration, Thammasat University, Bangkok, 1962. xxvi + 249pp.

著者は、現在タマサート大学行政研究所のAcademic DivisionのDirectorであるが、研究生活にはいる前には、内務省官僚として約10年間地方行政の実際にたずさわわり、その間Municipal Governmentに関する法令の制定、その機構改革にも直接関係した経歴を有する行政学者である。以上の経歴からみても、著者が主題に関する第一級の適任者たることはあきらかであるが、実際本書においては、著者の豊富な経験と、米英留学をふくむ広汎な研究活動からえられた学問的知識とが理論的に見事に整理・総合されている。目下のところ、本書に比肩しうような類書はほとんどみあ

たらぬ、といつてよい。

さて、タイのMunicipal Governmentは、1932年の革命につづく行政の地方分権化の一環として「上から」導入されたもので、1933年に最初のMunicipal Actが制定されている。その後幾度かの改革がなされたが、1963年現在、3つの市(Nakorn)と82の町(Muang)、35の村(Tambol)に「自治」が認められている。

本書においては、タイにおけるMunicipal Governmentの形成期たる1932~1957年の間における、その機構と運営の実際が直接の対象とされている。しかし著者の主たる関心は、むしろMunicipal Governmentより一般的には「地方自治」に関する中央政府の政策、その政策実施にあたっての政府官僚の行動様式の分析におかれている、といつてよい。その際著者は、たんなる記述的方法に満足せず、最近の行動科学的アプローチをも採用して、上述の諸問題をタイの文化的伝統、社会的経済的背景等にまで掘り下げて解明しているが、例えば「地方自治」未発達の要因の一つとして、タイ官僚制にみられる「温情主義」の伝統と政府を「慈恵的」なものとするタイ人民の心理的態度を指摘するなど、随所にすどい分析が示されている。その分析を一貫する著者の問題意識は、「西欧文化に起源する地方自治」制度のタイにおける定着・発展の可能性の問題である。著者は、Municipal Governmentの活動領域が拡大するに比例してかえって中央政府のコントロールが強化され、「自治」が制限される傾向が認められることを指摘しながら、しかし、例えば村レベルの指導者の選挙にみられるように、タイにもグラス・ルーツ・デモクラシーが存在しており、よき指導が適切になされるならば、地方自治の発展も期待できないことではないとしている。

最後に本書の構成を簡単に述べておくと、序章につづいて第一章「地方自治の起源と発展」、第二章「現行のMunicipal Governmentにおける伝統的観念の支配」、第三章「内務省の役割」、第四章「Municipal Governmentの機構：立法機関」、第五章「Municipal Governmentの機構：その行政機関」、第六章「Municipal Governmentの機能と財政」、第七章「結論：Municipal Governmentに関連する若干の問題の分析」という章別になっている。

本書は、その標題からみても、またその章別の構成

からみてもまぎれもなく行政学の分野に属するものである。しかし、同時にタイの政治的文化に関する研究であり、かかる視点からみてもきわめてすぐれた業績である。
(福島徳寿郎)

Joseph B. Kingsbury and Robert F. Wilcox: *Introduction to the Principles of Public Administration in Thailand*. Institute of Public Administration, Thammasat University, Bangkok, 1961. 122pp.

タイ国政治の研究者として著名なウイルソン教授は、タイの政治を理解するためにもっとも基本的なことは、この国の統治構造における行政機構の地位と役割を正しく認識することであり、それは事実上「権力問題」に先行する重要な問題である、と指摘している。事実、タイの官僚機構は、伝統的に、権力斗争に対してはつねに中立性を保ちながら、しかも機能的な独立性と組織的な統一性を維持してきており、政治指導者のひんばんな交替にもかかわらず行政の一貫性が確保されてきたのは、官僚機構のこのような特性と役割に負うところが大きい、ということはいさばしば指摘されているところである。かかる重要性にもかかわらず、タイ国行政に関する文献は、若干のモノグラフィーを除いて、わが国にはあまり紹介されていないように思われる。

本書は、表題からも判るように、タマサート大学行政研究所に客員教授として招聘された二人の行政学者が、テキスト用にまとめたまったくの入門書である。従って、本書に、各論点についての詳細な叙述分析を期待することはできないが、しかし一応行政の全側面が要領よくまとめられており、タイ国行政の全貌を把握するためには便利な概論書であるといえよう。122ページの薄い本ではあるが、二段組みになっているので、ページ数のわりには取り扱われている問題は多岐にわたっている。

本書は15章に細分化されているが、大別すれば四つの部分——行政および行政学に関する総論的叙述(第1～2章)、タイ国行政発展の略史(第3章)、各論的諸問題の分析(第4～14章)、およびタイ国行政の評価(第15章)から構成されている。各論的部分においては、行政の組織、管理、人事行政、財務行政、行政に対するコントロール、行政責任の問題が扱われてい

る。全体として、行政学の最近の理論的成果を集約しながら、それに照らしてタイ国行政の特質と問題点を明らかにするという叙述形式がとられている。

著者達がタイ国行政のもっとも重大な欠陥として強調している問題は、行政の政治的、道徳的な無責任性と非能率性である。政治的無責任性の克服のためには、政党の育成と自由な選挙の実施なかんづく利益集団その他の自発的な市民組織の発展の必要性を指摘し、道徳的無責任すなわち腐敗の克服のためにもっとも基本的なことは、タイ官僚の行動様式にみられる伝統的な「人への忠誠」を克服して職務そのものに対する忠誠心を培うことである、としている。またタイ国行政にみられる非能率性の原因としては、組織上の欠陥とくに行政諸機関の無計画的な肥大増殖、過度の中央集権化、権限の分配にみられる諸欠陥、行政政策にみられる計画性の欠如、形式主義と法規万能主義をあげている。

はじめに述べたように、本書はまったくの入門書である。しかし、わが国ではタイ国行政の研究にはまだ全然手がつけられていないのが実情であるので、今後の研究のための手掛りの一つとして紹介することにした。
(福島徳寿郎)

The Mrabri: Studies in the Field (The Journal of the Siam Society, Vol. LI Pt. 2). Bangkok, 1963. 68p. (= pp. 133-201) with lists and photos.

Mrabri は一般に“Phi Tong Luang”の名でよく知られたタイ国北部の放浪民で、その primitive な生活のため色々な関心が抱かれながら、少数であることと elusive な放浪のために接近が容易でなく詳しい実態はよく知られていない。The Siam Society Research Centre では1962年8月の第1回調査に次いで1963年1月末に再び Kraisri Nimmanahaeminda 氏をヘッドに第2回目の Mrabri 調査を Amphur Na Noi (C. Nan) の山中で行なった。本書は、JSS の1号をこの第2回調査の報告に特集号として割当てたものである。

内容は5篇の論文からなっている。すなわち、(1) J. J. Boeles 氏の、この調査のあらましと material culture を主とした文化人類学的な報告、(2)西独 Bonn から参加した Dr. G. Flatz の形質人類学的報告、

(3) Kraisri 氏による, Mrabri 語および近隣のモン・クメル系諸言語の対照語彙表と, かつて Bernatzik が発表した Yumbri の語彙と Mrabri との対照表, (4) C. Velder 氏の, Mrabri camp のはじめての記述, および (5) W. Smalley による前記語彙表の言語学的な注釈ノート, の5篇である。

この調査ではとくに Kraisri の言語調査に重点がおかれたようであり, 実際, 本書の対照語彙表も, Mrabri 語のみならず他の北タイのモン・クメル諸語(カー諸語, ラワ語, モン語など)がほとんどこれまで未発表のものであるから, Mrabri に限らずこの系統の言語に関心をもつものにはまことに有難い資料である。残念ながら, (本書全体がそうであるが) どちらかといえば一般向きに書かれているため, たとえば, Smalley の注釈にもある通り音表記の方法が余りに粗雑であり, おそらく著者たちの意図以上にはとうてい利用できないであろう。Boeles 氏はいくつかの今後の課題として, Mrabri 語と他のモン・クメル諸語との比較および Mrabri 語の音韻論の研究をあげているが, 実際には比較言語的研究に先だててまずその言語の音素体系が明らかにされなければならないのである。

文化にしても, 専ら material culture について述べられていて social structure や他の民族との接触の問題は残された課題とされているが, この調査自体が著者のいうように pilot project なのであって, 対象が対象だけに有益でもあり読み物としても結構面白い書物となっている。(三谷恭之)

S. Takdir Alisjahbana: *The Failure of Modern Linguistics in the Face of Linguistic Problems of the Twentieth Century*. Kuala Lumpur, University of Malaya, 1965. 36p.

本書は, 著者が1964年12月22日にマラヤ大学で行った inaugural lecture であって, 当センターから同大学に留学していた前田成文氏からわたくしに読むことをすすめられたものである。

内容は, アジア・アフリカ地域の若々しいエネルギーを感じさせるもので, 極端なまでの言語学の現状批判と, この地域の国々が直面している現実の言語問題を解決するための新しい言語学創設の提唱である。

著者は, アメリカの構造言語学にしるヨーロッパの glossematics にしる, 現代の言語学は現実社会から遊離した実質的意味の乏しい学問になっていると強く非難している。音韻という言語の外面に専ら関心を集中したり, esoteric なまでの形式主義に陥っている, といい, とくに, 言語がそれ自体で安定した記号の体系であって言語学はそれを記述する学問だという根本前提がそもそもの誤りだという。なぜなら, 現実の困難な問題は言語の変革にあるのだから, というのである。

AA諸国が現在まじめにとりくんでいる nation building と modernization の問題のひとつとして, 各国とも言語の standardization と modernization の問題がある。安定した national language をいかに形成していくか, 近代社会にマッチした思考とコミュニケーションのためにいかに言語を合理化するか, 次々に入ってくる新しい概念に対する語彙の問題をどう処理するか, こういった language engineering がそがに必要なのだ, というのが著者の主張である。本書の後半では, マレー語とインドネシア語について具体的な問題をひとつの例として簡単に説明している。

現代言語学がしばしば形式的・表面的であることはこれまでもむしろ伝統的な言語学者から批判されてきたし, 現実の問題解決に対する意欲にかけることも確かであって, この点は何よりもまず強く反省されてしかるべきであろう。しかし, 著者が現代の言語学の範囲を狭くみすぎているということは別としても, この書の提起する問題はあまりに大きすぎる。第一にそれがもはや学問論の問題に関連していること, 次にこのような問題解決に果たして構造言語学の考え方自体が本質的に無効なのかどうかということ, また現実の問題といっても著者の立場とは別にわれわれにはまずそれが外国語の問題であるということ, こういった点で著者の主張がすべての言語学者たちを納得させるか, どうであろう。(三谷恭之)

Hydrologic Data (Thailand): National Energy Authority, Ministry of National Development, Thailand, 1965.

タイ国の全般に渡っての水文資料の年報であり, その内容は流量記録, 浮遊流下土砂量, 日降雨量, 日蒸発量, 風速におよんでいる。

本書は Mekong プロジェクト, Nam Pung プロジェクト, Pattni プロジェクト, Nakorn Srithamarag プロジェクトおよび河川開発プロジェクトにおいて, National Energy Authority によって作業をされ集計されたものである。最大の目的は降水量と流出量との関係を研究するにある。

流量観測所の数は46ヶ所である。内容は月間流出量, 平均流出量 1000km² 当りの平均流出量, 流出高, 流出量, 最大日流量および最小日流量がある。

なお, このうちの観測所の一部はメコン河開発の一環として建設された部分も含んでおり Lower Mekong Hydrologic Yearbook と多少重複する点もあるが, 東北タイの水利計画に対する研究を行う場合の重要な参考資料の一つと考えられる。

1962年の水文年報は1964年に出版され, 1963年のものは1965年に出版されたが, 何れも販売はしていない。何れも市販されていないもので寄贈形式で頒布されている。(南 勲)

Lower Mekong Hydrologic Yearbook.
Committee for Coordination of Investigations of the Lower Mekong River Basin, 1964.

メコン河は4ヶ国にまたがる大河川でありその水力電気, かんがい, 舟行, 洪水調節および民生に対する総合的な発展を目的として, カンボジア, ラオス, タイ, ベトナムの4ヶ国により, メコン河委員会が設立されている。本水文データはこれらの諸国の水利開発分野で各国それぞれに重要な基本的な資料である。とくに水源計画に際しては技術的にも経済的にも重要な資料である。本書により低部メコンの流量特性の概要をつかむことができる。

最初の年報は1962年の水文資料に対するもので, 以後毎年継続して出版することが決定されている。1963年度の水文年表は1964年2月に出版された。

本水文年表はその初版から数えて現在まだ第2巻しか出ていないが, 東南アジアの水利計画を研究する上に極めて重要な資料となるものと確信している。

本水文年表の内容は流量観測値がメコン河本流ならびに支流に対して集録され, 次に流水中に浮遊運搬されている泥土量, 日降雨量がラオス・カンボジア・タイ・ベトナムに渡って記され, また日蒸発量および毎

日の風速が記録されている。

いずれも販売はしていない。(南 勲)

Theodore Friend: *Between Two Empires, The Ordeal of the Philippines, 1929-1946.* Yale University Press, New Haven, Conn., 1965. xviii+312p.

このたび「2つの帝国に挟まれて——1929年から1946年に至るフィリピンの試練——」と題する本書を手にして, 私はひじょうに嬉しかった。というのはフィリピンを理解するためには, その歴史的背景をよく知っておくことが必要である。とりわけ, フィリピンとアメリカとの関係の歴史的展開こそ, フィリピン理解の鍵であるといえよう。ところが, これについてまとまった文献がこれまで出版されていなかった。

もともと米比関係は, 本書の著者, The State University of New York at Buffalo の歴史学準助教授フリード氏によると, つぎのように区分される。

- 1) 1896—1902: スペインおよびアメリカにたいするフィリピンの革命戦争。
- 2) 1901—13: 共和党政権下での政府・教育の《アメリカ化》。
- 3) 1913—21: 民主党政権下での行政の《フィリピン化》とナショナリズムの奨励。
- 4) 1921—29: フィリピンの希望とアメリカの抑止との均衡の漸次的実現。
- 5) 1929—35: 第1次植民地危機: 大恐慌・日本の膨張およびフィリピンのナショナリズムのためアメリカ議会は独立のスケジュール設定の方向に動く。
- 6) 1935—41: コモンウェルス時代: 不確実だが部分的に成功であった独立準備。
- 7) 1941—46: 第2次植民地危機: 日本の侵略および部分的な《日本化》, アメリカによる解放およびフィリピン主権の完全な獲得がつづく。

本書はこのうちでも, より重要な1929年の大恐慌から始めて1946年のフィリピン独立に至る期間をとりあつかう。著者は, フィリピン, アメリカ, および日本の文書を渉猟し, またこの3国にまたがるこの関係をインタビューしている。非常な努力と時間のかかった仕事だ。(アメリカ人の近代史あるいは現代史研究がとっているこの方法は, わが国ではもっと学びとら

れる必要があろう。

本書は5部からなる。第1部はフィリピンのコンテクストとして、フィリピンの社会・政治・ナショナリズム・リーダーシップなどの特質をとらえる。第2部は大恐慌、日本の進出、アメリカの後退開始期をとりあげる。第3部は独立のための米比間の折衝をとりあつかう。第4部はコモンウェルス時代。そして第5部は大試練と題してこの日本の進路・占領からフィリピン共和国の発足に至る。最後にクロノロジーと、非常にすぐれた文献目録がつけ加えられている。

歴史学者でない私は、本書の学問的価値を論ずることはできない。しかし、Yale Historical Publications, Studies 22 として本書が刊行されていることは、その学問的価値を証明するものでなかろうか。また私自身にとって、Quezon, Osmeña, Roxas などのフィリピンを動かした人々、あるいはアメリカ側の MacArthur, Stimson, Hoover, Roosevelt などの立役者の活動をまざまざ記録した本書は、まことに面白い読物でもあった。(本岡 武)

Geravdo P. Sicat (ed.): *The Philippines Economy in the 1960's*. Institute of Economic Development and Research, University of the Philippines. Quezon City, 1964. xii + 281 p.

フィリピン経済の代表的文献としては、コーネル大学のゴーレー教授の著書(F. H. Golay: *The Philippines, Public Policy and National Economic Development*. Cornell University Press, Ithaca, N. Y., 1960) があげられるが、本書はこれにつぐものとして評価されている。幸に、私は、去る6月たまたまフィリピン大学の経済発展研究所で本書を入手した。(米・英・独・仏などでの出版物は、外国書取扱い書店をとおして、わが国にどしどし入れられているが、東南アジア諸国での刊行物は、よほど注意しないと、ミスしがちになるからである。)

フィリピン大学経済発展研究所が、1963年10月から12月にかけて、「1960年代のフィリピン経済」という主題のもとで連続公開講演会をマニラで開いた。そのペーパーを教授が編集したのが本書である。1960年代の経済という主題であるものの、多くの論文は、この時間的限定をこえてフィリピン経済の構造の分析にお

よんでいる。

本文に収録されている論文をあげよう。

- 1) Sicat 教授によるフィリピン経済の総論
- 2) フィリピン大学 Romulo 総長の開講演説からの抜粋としての《1960年代のわれわれの任務》
- 3) フィリピン大学 A. Kintanar, Jr. 教授の《1960年代の公共部門開発のための課税融資》
- 4) 経済企画庁 A. V. Fabella 長官の《開発計画の若干の戦略的側面》
- 5) フィリピン大学 R. W. Hooley 教授の《1960年代の私的貯蓄：社会会計の一試論》
- 6) 国際稲作研究所 V. W. Ruttan 博士の《農地改革と国民経済発展》
- 7) 経済企画庁 D. M. Ferry 立法・政策研究部長の《農民改革の憲法的・社会的側面》
- 8) 国家経済会議 S. K. Roxas 議長の《フィリピンの地域的経済発展——1960年代の工業地域計画》
- 9) Sicat 教授の《フィリピン工業の構造——1960年代の見とおし》
- 10) フィリピン中央銀行 B. Legarda 調査部長の《フィリピン外国貿易の諸問題》
- 11) フィリピン大学 A. A. Castro 経済発展研究所長の《企画長期金融の諸問題》

各ペーパーの末尾に Open Forum として、聴講者と報告者との間の質疑応答が掲載されている。フィリピンでは、私の限られた経験によっても講演のあとのディスカッションが非常にすきなようだ。このディスカッションについては、長所短所いろいろとあるが、ディスカッションによって論点がより明らかになるという長所が認められる。本書はこの長所をよく生かしていると思われる。

個々の論文を批評する余裕はないが、Ruttan 博士の農民改革論はきわめてすぐれたものである。とくに、メンションしておく。(本岡 武)

Wacanānukom Phāsā Lāw khōng Kasuang Sūksāthikān. 2nd. ed., Vientiane, 1962 vi + 1125p. *English-Lao Dictionary (Wacanānukom Angkit-Lāw)*. compiled by Boon Thom Boonyavong, under the supervision of J. DeNoia, with the technical assistance of G. E. Roffe. Vientiane, Lao-

American Association, 1962. xi+367p.

ラオスの出版事情について詳しいことは知らないが、ビエンチャンの書店の店頭には並ぶラオス語の書物は数えるほどしかない。ほとんどがタイ語・英語・中国語またはベトナム語のものである。そのわずかなラオス語書物のうちでこの両書は最も価値のあるものである。

ラオス語の辞書としては、これまでも Cuaz の 仏=ラオ辞典や Guignard のラオ=仏辞典など主にフランス人の手になるものがずいぶんあって、それぞれ特徴があるので現在でも利用価値は十分にあるけれども、この両書の意義は新しさと現地の出版ということにあるであろう。前者はラオ=ラオ辞典で、教育省編纂であることからいわばラオスの標準国語辞典といふべきものであり、後者はラオス語で英語を説明した形式の英=ラオ辞典である。どちらもラオス人のための辞書という体裁をとっているから、われわれには間接的な利用しかできないが、語数にしても前者が1万近く、後者が6,000近くもあるし、従来の辞書とちがって少なくとも綴字のうえではこれを現在の標準ラオス語と認められるから、われわれとしても利用価値は低くない。

ことに後者の英・ラオの方は、実際にはわれわれがラオス語を引く辞書としても問題なく使えるもので、英語のラオス訳は正確のようであるし、タイプ印刷も鮮明で使いよい。もちろん、たとえば go v. i. に対する pai, ók pai, sadet などの用法の相違まで求めることができないのは仕方あるまい。

しかし前者のラオ・ラオ辞典は見出語の配列が極めて不便である。ひとつの子音字について、子音字+母音記号だけの音節からなる（またはそのような音節を頭にもつ）単語を掲げ、その後子音字+母音記号+子音字のものをかき、しかも母音記号の序列より末尾の子音字の序列を優先させている。(e.g. káp は、ká の次でも kán の次でもなく kap の次に見出される。) これはやはり現行のタイ語辞典の配列法にならうなりして、もう少し便利にしたいところである。

また、両書とも本来の目的からいって当然ではあるが、ラオス語の発音（音素形式）が示されていないこともわれわれにとっては不便である。ラオス語の正書法ではタイ語のような伝統的な不規則綴字といわれるものは整理されていてさほど問題はないとはいえ、わ

れわれの知りたいのはやはり実際に話されるラオス語の形である。

ともかく外国人研究者のための本格的なラオス語辞典が今後ただちに現れることはあるまいから、少なくともしばらくはこの両書が重宝なものとなることは疑いないだろう。

(三谷恭之)

天野利武編：チッタゴン地方の丘陵人—大阪大学東パキスタン総合学術調査隊報告書—1964, ii+316p.

東南アジアから南アジアにかけて旅したのち、チッタゴン丘陵地帯やアラカン山脈一帯がこの2地域を分ける地理的分水嶺であるのみならず、文化的分水嶺でもあることを知るであろう。ビルマからはじめてベンガルに行ったものは、そこで「本格的な」異国情緒をおおいに見いだすであろうし、南アジアや西アジアの旅につかされたものにとっては、ラングーンに着くと、そこに「ほんとうの」東洋を発見し、心にいい知れないやすらぎを感じることであろう。人間、風俗、習慣……あらゆるものがこのあたりで一変する。

本書は1964年2月20日から3月31日まで41日間にわたり、東パキスタンのチッタゴン丘陵地帯で調査をおこなった大阪大学東パキスタン総合学術調査隊の報告書である。

インドのアッサム州、ビルマの中西部にかこまれたこのチッタゴン丘陵地帯にはチャクマ族をはじめとするいろいろな山地民が住んでいるが、この報告書ではこれら山地民と同時に附近に住んでいるベンガル人も含めて、心理学、人文地理学、言語学、形質人類学、医学、薬学などの立場から調査研究がおこなわれている。内容は (1)チッタゴン丘陵地区の人口、(2)チッタゴン丘陵地区の集落、(3)丘陵人の社会と文化、(4)親族関係用語からみた丘陵人、(5)チャクマ族の言語とマルム・ムロ語彙集三題、(6)東パキスタン丘陵種族の文化変容にみられる象徴知覚の研究、(7)東パキスタンにおける青年の一般的生活意識について、(8)東パキスタンの人類学的研究、(9)東ベンガリ頭蓋について(予報)、(10)チッタゴン丘陵地区のアルコール蒸溜法について、(11)東パキスタンの医療と薬物について。以上のように11の論文は自然科学や社会科学の広汎な範囲にわたっている。

内容を見ていると、チッタゴン丘陵地帯の持つ学問

的魅力がたんのうされ、またそこで調査研究のできた隊員の方々をたいへんに羨しく思う。それに、短時間にしてはかなりの量のデータを集め、その努力を多とする。

しかしながら、まことに残念に思うのは、調査の期間が短いことと、出版の都合で資料の分析に時間が十分にかげられなかったことではなかろうか。たとえば、一例をあげると、チッタゴン地方の丘陵人が竹文化を持っているという客観的な事実にはまったく異議をさしはさむ余地はないけれども、竹の持つ特質が「丘陵人のパーソナリティーをきわめて象徴的に示唆するものと思われる」という記述になると、いささか無理があるのではないと思われる。筆者は竹と丘陵人の持つパーソナリティーの比喩として使ったのだとは思いますが、自然とパーソナリティーをむすびつけるには、労働過程のようないくつかの中間項が必要なのではなかろうか。

また、この種の調査報告書には調査隊の踏査の全体を示す地図と、簡単な隊の日記があれば、読者にとってたいへんに便利である。

以上、若干の問題はあるにせよ、この報告書はチッタゴン丘陵地帯研究のわが国におけるパイオニア・ワークであり、貴重な文献である。それゆえ、この報告書をもとに、南アジアと東南アジアをむすぶ学問的に重要なこの地域の調査研究がさらに発展することを心から望むのである。

(飯島 茂)

Richard B. Noss : *Thai Reference Grammar*, Foreign Service Institute, Department of State, Washington, D. C. 964. iv + 254p.

タイ語について書かれた書物は、タイ国にて行なわれて来た伝統的な文法や純粋に実用的な目的のみのために書かれたものとは別に、現在の記述言語学の立場から書かれたものとなると、ほとんど皆無と言ってよい程である。

本書はその様な数すくない書物のひとつである。と云うよりも、一定の方法をもって、タイ語と言う一つの言語の構造全体を記述しようとする書物としては、唯一のものではなかろうか？ この点においても、本書はアメリカにおけるタイ語研究の現在の水準を示すものと言ってよいであろう。本書であつかわれている言語はバンコックを中心として話されている標準タイ

語であり、著者が合計7人のインフォーマントを使ってアメリカ及びタイ国で四年間をついやしてまとめあげたものであって、それだけに詳細を極めたものである。本書の構成は、まず Introduction, 次いで Phonology, Morphology and Syntax, 最後に Lexeme Classes を論じ、この Lexeme Classes が Free Lexeme Classes と Bound Lexeme Classes とに大分される。これ等全体を通じて一定の方法論でもってつらぬかれている。

Phonology では、Phonemes を大別して Syllabic Phonemes と Prosodic Phonemes とする。前者には Consonants, Vowels 及び Tones があり、後者には Stress, Rythm, Intonation が含まれる。表記法は Haas 式の音素表記が用いられているが、Stress, Rythm, Intonation を考りよに入れた点で、本書の方が Haas よりも、より進歩していると言ってよいであろう。また従来タイ語には五つの Tones が認められて来たに対し、本書では六つの Tones を認めている。すなわち、これまでの(1)中平型、(2)低平型、(3)下降型、(4)上昇型に対し、(1) Plain High, (2) Constricted High, (3) Mid, (4) Low, (5) Falling, (6) Rising を設定する。しかし、この High に Plain High と Constricted High との二つを認めることには疑問を感じる。Plain High Tone を持つとされている Morphemes を見ると、/chan (Plain High) <一人称代名詞>、/khaw/(Plain High) <三人称代名詞>、/maj/(Plain High) <疑問を表わす morpheme> などのある特別なものにかぎられており、数的にも少ないことがわかる。したがって、わざわざ Tone を一つ多く設定するよりも、Prosodic Phoneme と言う観点から処理する方が、より賢明だと考えられる。

Morphology and Syntax においては、Prosodic Morphemes, Morphemes を論じ、ついで Lexemes の構成、Syntactic Construction について例をあげて説明して行く。最後に Lexeme Classes をあつかっている。上にあげた色々な点について、今ここで検討している余裕はないけれども、この様な現代記述言語学の方法によるタイ語の文法が現れたことは、タイ語研究にとってよろこぶべきことである。本書で用いられている様な方法論に賛成するか否かは別にして、一度は精読すべき書である。(桂 満希郎)